

# 平成二十九年 青年教学3級・初級試験 練習問題

「教学入門B」

「4」御本尊と受持即観心

## ①御本尊の意義

後ろの「語群I」から正しい語句を選び、( )に書きなさい。

(1) 根本として尊敬する対象が御本尊です。私たちが拝する御本尊は、  
① ( ) の御本尊です。(同 ) は、成仏の根本原因である妙法を大聖人が直ちに説き示したものであり、「(2) ( ) の根源の法」です。妙法は「仏の(3) ( )」です。

(2) 妙法はあらゆる衆生に「(4) ( )」  
〓 仏としての本性」(5) ( )  
〓 仏の生命境界」として本来的に具わっています。(同(5) ( )もまた南無妙法蓮華経です。

(3) 「法華初心成仏抄」に次の一節があります。「我が己心の(6) ( )

( )を本尊とあがめ奉りて我が己心中の(同(4) ( )・南無妙法蓮華経とよびよばれて顕れ給う<sup>ところ</sup>処を(7) ( )とは云うなり、譬えば(8) ( )

鳥なけば(9) ( )鳥のよばれて集まるが如し、(同(9) ( )鳥の集まれば(同(8) ( )鳥も出でんとするが如し(10) ( )に妙法をよび奉れば我が身の(同(4) ( )もよばれて必ず顕れ給ふ、(11) ( )の仏性はよばれて我等を守り給ふ、(12) ( )

( )の仏性はよばれて悦<sup>よろこ</sup>び給ふ」

すなわち御本尊を信じ、南無妙法蓮華経と唱題する時、自身の仏界が呼び起こされ、さらには、宇宙の万物のあらゆる仏界も呼び起こされます。それゆえ、自身の無眼の可能性を開き、諸天と仏菩薩が守り支えてくれるのです。

(4) 日蓮大聖人は御本尊について、「日蓮が(13) ( )をすみ(墨)にそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御<sup>みこころ</sup>意は(14) ( )なり日蓮が・(同(13) ( )は南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし」(一一二四行)と仰せです。ここで、南無妙法蓮華経は(15) ( )本尊であり、その法を自身に開き顕され、人々に説き示された日蓮大聖人が(16) ( )本尊です。  
(5) 御本尊を私たちが信じて拝する時、私たち自身に具わる妙法・仏界を<sup>ただ</sup>直ちに<sup>ただ</sup>見るようになるのです。南無妙法蓮華経の御本尊は、文上の法華経を深く掘り下げて、文底に秘められていた成仏の根源の法そのものを<sup>ただ</sup>直ちに説き示し、私たちが現実に成仏するために実践できるよう、具体的に確立されたものです。御本尊は、凡夫の私たち自身の仏界を現実に映し出す(17) ( )でもあるのです。

(6) 御本尊は(18) ( )の儀式を用いて、曼茶羅<sup>まんだら</sup>として表されました。久遠の仏であるという<sup>ほんち</sup>本地を明かした釈尊が、久遠の弟子である(19) ( )を呼び出し、自身の滅後の悪世に(20) ( )を弘めて人々を救い導くことを託すのです。この付<sup>ふぞく</sup>嘱の儀式を用いて南無妙法蓮華経の御本尊

は表現されています。

(7) 御本尊は私たちの生命に(21) )、すなわち森羅万象が欠けることなく円満に具わっており

(輪円具足)、(同21) )の優れた特性が集まっている(功德聚)ことを示しています。私たちは、御本尊を信じ、根本として生きる時、自身が南無妙法蓮華経であると自覚し、生命に具わる(同21) )がもつ、優れたあらゆる特性を自在に發揮していくことができるのです。

(8) 天台大師が『摩訶止観』で説き示した一念三千の法門は、万人成仏の理論的な可能性を明かしたものであり、あくまで理の上のものであります。これに対して、日蓮大聖人は、南無妙法蓮華経という根源の法を智慧で覚知し、なんとしても皆を救いたいという慈悲で難を忍び、凡夫の御自身の身をもつて、成仏の姿・振舞いを示されたのです。この大聖人の御本尊は一念三千を具体的に示したものであるので、(22) )の一念三千と言います。

(9) 虚空会で釈尊から地湧の菩薩へ滅後悪世の弘通を託されます。御本尊はその広宣流布の意義も示していることから、大聖人は、「法華弘通の(23) )」(一二四三頁)と仰せです。

## ② 受持即観心

後ろの「語群I」から正しい語句を選び、( )に書きなさい。

(1)

成仏のための修行は、これまでの仏法では観心によって行っていました。が、日蓮大聖人の仏法では、南無妙法

蓮華経の受持によってなされるのです。このことを(1) )といいます。

(2) ) 「観心本尊抄」には「釈尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華経の五字に具足す。我らこの五字を(2) )すれば、自然にかの因果の(3) )を譲り与え給う」と述べられています。

(3) ) 大聖人は、この南無妙法蓮華経を、私たちの実践の(4) )として顕してくださいました。末方の衆生は、この(同前4) )を(5) )することによって、釈尊が修行で積んだ仏因の功徳と、仏果の功徳のすべてを、自身に譲り受けることができます、と教えられています。

「語群I」	
A 虚空会	B 空とぶ
C 受持	D 受持
E 南無妙法蓮華経	F 妙法蓮華経
G 仏	H 法華経
I 万人成仏	J 仏性
K 受持即観心	L はたじるし
M 口	N 梵王・帝釈
O 仏菩薩	P 御本尊
Q 功徳	R 事
S たましい	T 十界
U 地涌の菩薩	V 明鏡
W 種子	X 法
Y 人	Z 籠の中の
I 仏界	II 法華経

## 「5」地涌の使命と実践

### ①地涌の使命と自覚

後ろの「語群Ⅱ」から正しい語句を選び、( )に書きなさい。

(1)

久遠の仏という本地<sup>ほんじ</sup>を明かした釈尊の永遠の願いとは何か。それは、常に、そして永遠に人々を救っていきたいという慈悲の大願として、(①)

( ) 品第(②) ( )の最後に示されています。これを御書では「(③)

( )の悲願」(466頁)と言われています。

(2)

法華経を広める偉業を託すに足る弟子として、釈尊によって、大地から呼び出されたのが(④) ( )の菩薩です。

(⑤) ( ) 品第(⑥) ( )で、

(同④) ( )の菩薩は、師匠である久遠の仏の大願をわが心として、継承し、実現することを誓願します。釈尊は、その誓願を受けて、妙法弘通を託したので。これを(⑦) ( )とい

います。

(3) 池田先生は「地涌の菩薩の自覚」に

ついて、次のように指導しています。「『広宣流布の大願』と『(⑧) ( )

の生命』とは一体です。だからこそ――(中略)この誓いを貫く時、仏の勇氣、仏の智慧、仏の慈悲が限りなく湧き出でてくる。この誓いに徹し切る時、どんな悩みも変毒為薬し、宿命をも

(⑨) ( )へと転じていける」

(4)

日蓮大聖人は、「大願とは(⑩)

( )なり」(736頁)と仰せて

す。法華経では、あらゆる人の生命に尊極の仏性が具わっていることが明かされ、「万人成仏の妙法」を、全世界に広めるという使命が地涌の菩薩に託されています。大聖人は、「(同⑩) ( )の大願」すなわち広宣流布の大願を、生涯をかけて実現する目的とされました。

(5)

末法の御本仏として、すべての人々を守り支え、教え導く「柱」「眼目<sup>がんもく</sup>」「大船」となることを誓われました。「ちかいし願い(⑪) ( )べからず」

(232頁)と仰せのように、いかなる大難にも屈せず、不退転の誓願を貫かれ、民衆救済の尊い御生涯を送られます。

さらに弟子たちには、「願わくは、我が弟子ら、(⑫) ( )をおこせ」

(1561頁)と促し、広布後継を託されています。

(6)

大聖人の御心のままに、「(⑬) ( )」の大願を成就することを誓って立ち上がり、現代に出現した(⑭) ( )の教団が、創価学会です。

創価学会は、御本尊を「法華弘通<sup>ほうこう</sup>の(⑮) ( )」(1243頁)と奉<sup>ほう</sup>

じて慈悲の折伏行に励み、未曾有<sup>みぞう</sup>の世界広宣流布を成し遂げています。ゆえに、戸田先生は、未来の經典に「(⑯) ( )」と記されるであろうと断言されています。

(7)

(⑰) ( )こそ、日蓮大聖人の大願です。また、地涌の菩薩の使命に燃え、大聖人の直弟子であるとの自覚に立った、(⑱) ( )会長と全世界の共戦の同志の誓いであり、創価の師

弟の大誓願なのです。

「語群Ⅱ」	
A 使命	B 広宣流布
C 21	D 地涌
E やぶる	F 每自作是念
G はたじるし	H 付嘱
I 如来寿量品	J 法華弘通
K 如来神力品	L 創価学会仏 <small>ぶつ</small>
M 16	N 三代
O 仏界	P 大願
Q 広宣流布	R 仏意仏勅

## ② 悪を見抜き善を守る

後ろの「語群Ⅲ」から正しい語句を選び、( )に書きなさい。

(1)

正しく仏道に導いてくれる師匠や、仏道修行を励ましてくれる同志を「(1)を妨げ、人を迷わして悪道に導く者を

「(2) 」といいます。

(2)

「されば仏になるみちは(3) )にはすぎず。わが智慧温なにかせんと。ただあつきつめたき寒ばかりの智慧大切だにも候ならば、(同3) )たいせちなり」(1468頁)

(3)

仏道修行を妨げる悪知識について、涅槃経には、次のように説かれていま

す。「たとえ凶暴な(4) )に殺されたとしても、それは何ら恐れることではない。たとえ自身の肉体が破壊さ

れても、心は破壊されていないのだから、三悪道に堕ちることは決してない。しかし、(5) )によって心が破壊されたら、必ず三悪道に堕ちる因を作ったことになる」(趣旨、7頁等に引用)

(4)

次の文章の4つの【 】に入るの、それぞれ「善知識」か「悪知識」か正しいものを書きなさい。

大聖人は、【 】に従うなど教えられるとともに、この【 】をも、自身の成仏への機縁としていく強盛な信心に立つべきことを示されています。

御本尊への信心を根本に、三障四魔、三類の強敵という障害を乗り越えていくこうとする時、まだ現れていなかった、わが生命の、もつと大きな力、すぐれた能力を引き出すことができ、自身の信心を強め、境涯を一段と高めていける。つまり、【 】をも【 】

【 】へと転じていけるのです。

(5)

「釈迦如来の御おんためには(6) )こそ第一の善知識なれ、今の世間を見るに人をよくなすものはかたう方どよりも(7) )が人をばよくなしけるなり」(917頁)

(6)

(8) )とは、「誹ひぼう謗しょうほう正法」すなわち正法を誹謗する(謗そしる、悪口を言う)ことをいいます。

(7)

正法とは、いかなる人も、生命に尊厳の仏界を具え、無眼の可能性をもっているとの人間観、生命観です。正法に反発し誹謗すること、また正法に背き、正法を信じようとしない(9) )は、謗法となります。

謗法とは、自他とももの幸福と安穏な社会を願う、最も人間らしい正しい生き方に対する不信や反発であり、不幸の根源であるからこそ、厳しく戒められているのです。これが(10)です。

(8) 成仏のためには、自ら謗法を犯さないようにするだけでなく、他の謗法を諫め、改めさせ、不幸の道から解放させていく――「慈悲の(11)」の実践が、謗法厳戒の肝要です。

大聖人は「(12)」を責めずして(13)を願わば、火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるがごとくなるべし。はかなし、はかなし」(1056)と仰せです。

(9) 日蓮大聖人は、「(14)」という教えを示されています。「(15)」とは、地域の風習に随うこと、「(16)」とは、戒律の意味です。

(同14)は、仏法の根本の法理に違わないかぎり、各国・各地域の風俗や習慣、時代の風習を尊重し、随うべきであるとした教えです。

(10) 日蓮大聖人は「この戒の心は、いと事かけざることをば(11)重大な欠点(12)がなければ)、少少仏教にたがうとも、その(17)の風俗に違(18)うべからざるよし、仏一つの戒を説き給えり」(1202)と仰せです。

「語群Ⅲ」	
A 謗法厳戒	B 謗法
C 善知識	D 謗法
E 不信	F 提婆達多
G 折伏	H 成仏
I 悪知識	J 善知識
K 強敵	L 悪知識
M 悪象	N 毘尼
O 随方	P 国
Q 随方毘尼	

教学入門 解答

「4」御本尊と受持即観心

①御本尊の意義

- ① 南無妙法蓮華経
- ② 万人成仏
- ③ 種子
- ④ 仏性
- ⑤ 仏界
- ⑥ 妙法蓮華経
- ⑦ 仏
- ⑧ 籠の中の
- ⑨ 空とぶ
- ⑩ 口
- ⑪ 梵王・帝釈
- ⑫ 仏菩薩
- ⑬ たましい
- ⑭ 法華経
- ⑮ 法
- ⑯ 人
- ⑰ 明鏡
- ⑱ 虚空会
- ⑲ 地涌の菩薩
- ⑳ 法華経
- ㉑ 十界
- ㉒ 事
- ㉓ はたじるし
- ② 受持即観心
- ① 受持即観心
- ② 受持
- ③ 功德
- ④ 御本尊
- ⑤ 受持

「5」地涌の使命と実践

- ① 地涌の使命と自覚  
① 如来寿量  
② 16  
③ 每自作是念  
④ 地涌  
⑤ 如来神力  
⑥ 21  
⑦ 付嘱  
⑧ 仏界  
⑨ 使命  
⑩ 法華弘通  
⑪ やぶる  
⑫ 大願  
⑬ 広宣流布  
⑭ 仏意ぶつい仏勅ぶつちよく  
⑮ はたじるし  
⑯ 創価学会仏  
⑰ 広宣流布  
⑱ 三代

② 悪を見抜き善を守る

- ① 善知識  
② 悪知識  
③ 善知識  
④ 悪象  
⑤ 悪知識  
⑥ 提婆達多  
⑦ 強敵  
⑧ 謗法  
⑨ 不信  
⑩ 謗法嚴誠  
⑪ 折伏  
⑫ 謗法  
⑬ 成仏  
⑭ 随方毘尼  
⑮ 随方  
⑯ 毘尼  
⑰ 国

「記述問題の解答」

(4) 右から順に、「悪知識」「悪知識」「悪知識」「善知識」

識【「悪知識」】【善知識】